

メンデルスゾーンと日本

— 原典資料の内容と来歴を通して —

Mendelssohn and Japan

— The Transmission of His Music and Sources to the Far East —

星野宏美
HOSHINO Hiromi



音楽学、原典資料、メンデルスゾーン、讃美歌、唱歌

Key words: Musicology, original sources, Felix Mendelssohn Bartholdy, church hymns, school hymns

Abstract

Three autograph scores and two autograph letters by Felix Mendelssohn Bartholdy are known to exist in Japan. In this paper, the content and provenance of three of these original sources are discussed: the autograph piano-vocal score of *Die erste Walpurgisnacht* op. 60, the autograph of a canon (*Etude für eine Violine, oder Canon für 2 Violinen*) as well as the letter of 15th November 1845 addressed to Kupsch, Gesanglehrer in Berlin. In addition I will examine how Mendelssohn's music spread to the Japanese public soon after the opening of the country in the mid 19th century. At the time the public were exposed to Western classical music for the first time, and classical music was primarily used for singing together in the newly founded churches and schools with various new texts. For example, Mendelssohn's *Festgesang* No. 2, which has been popular in England and the USA as the Christmas carol *Hark! The Herald Angels sing*, became not only one of the most beloved church hymns in the Japanese translation, but it was also sung as a school hymn with several new patriotic texts until the Second World War. Interestingly, similar parodies of *Festgesang* such as "Luther-Cantate" and "Kaiserkantate" can be observed in imperialistic Germany at the turn of the century as well.

1. はじめに

フェーリクス・メンデルスゾーン・バルトルディ（1809～47）の原典資料は、こんにち世界各国に所蔵されている。主要なコレクションがドイツと英国、そしてアメリカ合衆国にとどまったのに対し、個々の小規模な資料はさまざまな経緯により世界中に拡散した。日本にもいくつかの貴重なメンデルスゾーン資料がある。文化財的にも、学術的にも価値の高いこれらの資料が、日本という極東の島国にいつどのように漂着したのか、また、今、実際に日本にどのような資料があるのか、それらは世界のメンデルスゾーン研究に対して、また、私たちのメンデルスゾーン理解に対してどのような意味をもつのか、いくつかの例を挙げながら考察したい¹⁾。

はじめに、本論で扱う資料の概略を示す。メンデルスゾーンに関連する資料の中で最も重要なのは、彼の自筆譜である。加えて、メンデルスゾーンに近い人々の手による筆写譜があるが、その価値判断はやや複雑になるので、本論では扱わない。ラルフ・ヴェーナー編『メンデルスゾーン作品総目録』（Wehner, 2009）²⁾には、こんにち知られるかぎりの自筆譜すべてと、筆写譜のとくに重要なものが網羅されており、その数は約2500にのぼる。同『目録』巻末の所蔵先索引には、公共機関の所蔵資料が国別に列記されているが、日本のものは6つ挙げられており、そのうちの3つが自筆譜である。索引で日本の上にあるアイルランドにも3つの自筆譜、そしてそのさらに上のイタリアには4つの自筆譜と1つの筆写譜が挙げられているので、所蔵数の上で日本はヨーロッパ諸国に見劣りしないことがわかる。また、個人蔵を除けば、日本は欧米以外でメンデルスゾーンの資料を有する唯一の国であることも、特筆に値しよう。

メンデルスゾーンの直筆によるもうひとつの重要な資料は、膨大な数の書簡である。彼の生涯や交友関係、仕事の交渉や個人的な心情、さらには作品成立の背景などを伝える情報の宝庫となっている。1816年、7歳の時から1847年に38歳で没するまでに彼が書いた手紙がこんにち約5000通知られており、2008年末に『メンデルスゾーン書簡全集』（Loos, 2008-）として出版が開始された。2014年まで毎年2巻ずつ全12巻に、全書簡が年代順に収められる予定である。巻末には詳細な注と索引が付されており、今後の研究が飛躍的に促進されよう。自筆書簡のうち、メンデルスゾーンが家族や親しい友人にあてたものは、大半がまとめて伝承されているが、内容的にそれほど重要でない個々の短い手紙は、早い時期から散逸を免れ得なかった。日本では2通の自筆書簡が公にされているが、その他にも、秘かに個人収集家の方々の手元に渡ったものも少なくないであろう。

自筆譜そして自筆書簡という、メンデルスゾーンの手書きの資料と同様に重要なのは、彼が存命中に自らの管理のもと出版した初版楽譜である。メンデルスゾーンは、本来は瞬間の芸術である音楽が楽譜出版を通して永続性を獲得することを十分認識しており、厳選した作品のみ、それも納得いくまで改訂を重ねた上で出版に供した。彼は校正刷りを入念にチェックし、その際にまた最終的な修正をも行った。作品の完成という点において、存命中の出版譜のほうが自筆譜より作曲者の最終的な意図を反映していることが多い所以である。一方、メンデルスゾーンの没後に

は、演奏習慣の変化もあり、初版楽譜のアーティキュレーションやフレージング、さらには音さえもが変更された出版譜が流通し始めた。彼の作品の中には、このように後世に歪められた楽譜を通して慣れ親しまれてきたものも少なくない。メンデルスゾーンの作品の本来の姿を見極めるために、初版楽譜の検証は不可欠である。日本の音楽大学附属図書館のいくつか、また個人収集家の方々が少なからぬ初期出版譜を所蔵しており、これらも日本における貴重なメンデルスゾーン資料と位置づけられる。しかしながら、メンデルスゾーンの初版楽譜はいずれも世界に複数存在し、コレクションの規模の上では、欧米の大図書館に日本の所蔵は到底かなわないので、本論ではとくに触れない。

それに対して、日本独自の視点として本論で言及したいのは、洋楽導入期に我が国で流通したメンデルスゾーンの出版譜である。彼本人には関わりない資料であっても、当時の日本においてメンデルスゾーンの音楽がどのような資料を介して広まっていったのか、興味深い問題であるし、これらの日本独自の資料は、続く時代に日本人がメンデルスゾーンの貴重資料を入手するに至る下地を形成したとも捉えられよう。洋楽導入期の資料は大まかに2種類に分けることができる。ひとつは、専門教育の場で用いられた楽譜だが、これについては研究が進んでいないので、今後の課題としたい。もうひとつは、より一般的な普及に貢献した楽譜である。本論ではとくに、讚美歌、唱歌を通してのメンデルスゾーン受容の例を取り上げる。

以上で概観した自筆譜、自筆書簡、日本独自の資料という3つの視点から以下、具体的に考察する。

2. 日本におけるメンデルスゾーン自筆譜

現在、日本にあるメンデルスゾーンの自筆譜の中で、最も大規模で、学術的な価値が高いのは、ヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（1749～1832）の詩に基づくバラード《最初のワルプルギスの夜》（Op. 60; MWV D3）のピアノ編曲譜である。1990年から東京・町田市の玉川大学教育博物館に所蔵されている。2005年にカラー高画質によるファクシミリとして出版された。筆者による日英2カ国語の解説が付されているので（星野、2005）、詳細はそちらに譲ることにし、要点を以下に記す。

《最初のワルプルギスの夜》は、メンデルスゾーンが1830年から1843年まで13年にわたって作曲に取り組んだ、彼の代表作のひとつである。本来は独唱と合唱および管弦楽のための大作だが、出版の際、当時の慣習に倣って、管弦楽部分を作曲者自身がピアノ用に編曲した小編成版も一緒に発表された。玉川大学に所蔵されているのはその自筆ピアノ編曲譜である。1843年に書かれ、ドイツの楽譜出版社に保管されていたが、1891年にオークションに出されて以来、実に一世紀にわたって行方不明となっていた。過去に研究対象となることがない新発見資料である。編曲譜とはいえ、作品全体の自筆譜であり、作曲プロセスの最終段階を解明する上で数々の手がかりを含むという点でも、高い資料価値を有する。

全48ページからなるこの自筆譜の至るところに、メンデルスゾーンの修正や加筆が見られる。最も大規模な修正跡は、終曲冒頭にある（自筆ピアノ譜 p. 45）。ここで彼は、合唱の入りを半小節早めることによって、劇的転換の効果を高めている。幾重もの斜線を引いて念入りに修正されているが、自筆譜の現物はもちろんのこと、ファクシミリを見れば、抹消された内容ばかりか、メンデルスゾーンの実際の手の動きや息遣いさえもが伝わってくる。興味深いことに、ここでの修正は管弦楽オリジナルの自筆総譜にも書き入れられたのだが、そちらの修正はそれでは終わらず、後になってさらなる修正が書き加えられた。この二段階による修正の跡は、自筆総譜を見ただけでは区別がつかず、自筆ピアノ譜との比較を通して初めて明らかになるのである。前述のとおり、《最初のワルプルギスの夜》は、メンデルスゾーンが13年の歳月をかけて取り組んだ作品である。彼は出版直前まで、こうして改訂を続けたのであった。玉川大学の自筆ピアノ譜は、メンデルスゾーンが徹底的な推敲型の作曲家であったことを力強く示している。

この自筆ピアノ譜には、メンデルスゾーンが楽譜を書き上げた後、ピアノに向かって試し弾きした際に書き込んだと考えられる修正跡も見られる。楽譜全体はインクで書かれているのに対して、これらの修正は鉛筆による。たとえば、第7曲の「アンダンテ・マエストーソ」に入ったところ（自筆ピアノ譜 p. 40）では、管弦楽オリジナルのリズム、すなわち、複付点による鋭いリズムがインクで書かれた後、鉛筆で付点リズムに変更されている。管弦楽オリジナルでは複付点は保持されており、このリズム変更はピアノ譜独自の変更である。実際に弾いてみてメンデルスゾーンは、ピアノ編曲では複付点リズムの効果があまりないことに気づき、それよりもピアノの弾きやすさを優先させたのだろう。オリジナルに忠実でありながら、演奏の効果を柔軟に考慮した改変は他にも多々見られる。演奏の現場に常に密着した彼の作曲の姿勢を表していると言える。

メンデルスゾーンのピアノ編曲譜は近年、確かに再評価されつつあり、いわゆる新全集、すなわち、ライプツィヒ版メンデルスゾーン作品集（*Leipziger Ausgabe*, 1997-）の中でも出版の対象とされている。しかし、《最初のワルプルギスの夜》に関しては、長いこと行方不明だった自筆ピアノ譜が辺境の地、日本で発見されたからこそ、自筆譜そのものも、またピアノ編曲という従来は二義的に捉えられてきた領域も、より注目を集めたと言えるのではないだろうか。つまり、日本への資料の流入が国際的な研究の流れに資するところもあったのではないかと考えられる。筆者はメンデルスゾーンの「スコットランド」交響曲に取り組んだ博士論文（星野、2003）執筆時から彼のピアノ編曲に注目してきたが、日本で突如発見されたこの自筆譜にじっくりと向き合うことにより、その重要性を再認識することになった。今現在、大規模な管弦楽曲や室内楽曲のピアノ編曲について研究を進めており、2009年夏にライプツィヒで行われたメンデルスゾーン国際シンポジウムで成果の一部を発表した（Hoshino, forthcoming）。

《最初のワルプルギスの夜》の自筆ピアノ譜は、来歴もまた魅力的である。これは、1990年に玉川大学に寄贈されたカサド・コレクションに含まれる。カサド・コレクションとは、スペインのチェリスト、ガスパール・カサド（1897～1966）とその妻の日本人ピアニスト、原智恵子

(1914～2001)の遺品を中心とした、西洋音楽資料の膨大なコレクションである。3000を越える楽譜を中心に、その他の数え切れない資料からなる。楽譜のうち600以上が手稿譜であり、資料価値の高いものも散見される。カサド自身の作品の自筆譜、編曲譜、演奏譜のほか、カサドや原に献呈された同時代の作曲家の自筆譜、夫妻が収集した過去の作曲家の自筆譜・自筆書簡などもある。たとえば、フランツ・リスト(1811～86)の手紙、ホアキン・ロドリゴ(1901～99)やルイーゼ・ダラピッコラ(1904～75)、オットリーノ・レスピーギ(1879～1936)、戸田邦雄(1915～2003)、山本直忠(1904～65)の自筆譜などである。

こうした貴重資料の中でも傑出した存在である《最初のワルブルギスの夜》の自筆ピアノ譜は、1926年、ジュリエッタ・ゴルディジアーニ・フォン・メンデルスゾーン(1871～1955)という人物から29歳のカサドに贈られた。ジュリエッタ・ゴルディジアーニ・フォン・メンデルスゾーンは、名前から推し量られるようにイタリア出身で、ベルリンのメンデルスゾーン家に嫁いだ女性である。彼女の夫はローベルト・フォン・メンデルスゾーン(1857～1917)。作曲家フェーリクスの叔父ヨーゼフ・メンデルスゾーン(1770～1848)の曾孫にあたる人物である。ヨーゼフは1795年にメンデルスゾーン銀行を設立し、その直系——ローベルトも含む——は代々銀行の経営に携わり、莫大な富と名声を築いた。彼らはまたモーゼス・メンデルスゾーン以来の一族の伝統に倣い、幅広い教養と芸術的素養を身につけた。とくにローベルトはチェロを巧みに弾きこなし、芸術の大パトロンであったことが知られる。1891年のオークションで《最初のワルブルギスの夜》の自筆ピアノ譜を落札したのがローベルトであったことは間違いなからう。そして1917年に彼が没すると、未亡人ジュリエッタがそれを相続し、1926年に当時親密な関係になり始めていたカサドに贈与したのである。生前のカサドと親交のあった日本人音楽家が口々に回想するように、ジュリエッタは公私ともにカサドの強力なパトロンであった。

ローベルトがオークションで落札した貴重資料の中で、ジュリエッタ、カサド、そして原を通じて日本にもたらされたものに、もうひとつ、現在は東京・立川市の国立音楽大学に所蔵されているヨーハン・ゼバスティアン・バッハ(1685～1750)の結婚カンタータ《満ち足りたプライセの街》(BWV 216)のオリジナル・パート譜がある(磯山、2005)。この楽譜は、ローベルトの没後、彼の又従兄弟であり、メンデルスゾーン銀行の共同経営者であったパウル・フォン・メンデルスゾーン＝バルトルディ(1875～1935)の所有と表向きにはされていた。ジュリエッタの名を所有者として公表できない、何らかの事情があったようである。パウル・フォン・メンデルスゾーン＝バルトルディは、作曲家フェーリクスの弟の孫にあたる人物であり、彼もまた富と名声と教養と文化の極みを享受した。このパウルの真の所有物の中に、彼が1910年にオークションで落札し、1934年まで所有していた有名なゴッホの《ひまわり》(1889年)がある。1916年当時のパウルの邸宅の写真には、この《ひまわり》が飾られているのが確かめられる(Badstübner-Gröger, 2006)。《ひまわり》はその後、何人かの手を経て、1987年にロンドンのクリスティーズのオークションに出品され、当時の安田火災海上保険が約53億円で落札し、大きな話題になった(『ゴッホと日本』、1992)。現在も、東京・新宿の損保ジャパン東郷青児美術館にて公開さ

れている。1900年前後にメンデルスゾーン一族が極めた豪華な文化的な生活——それはナチス政権が始まる前の最後の栄華の時でもあったのだが、そのような一族の栄光を伝える貴重文化財が、1990年前後のバブル末期の日本にいくつも入ってきたのは、何やら身につまされる気がする。

玉川大学所蔵の自筆譜に関連する記述が長くなったが、日本にあるもう2つのメンデルスゾーン自筆譜はいずれも小規模なもので、戦後、古書店を通して日本にもたらされた。

ひとつは、東京・江古田の武蔵野音楽大学に所蔵されているホ短調のピアノ小品である。日付やサインはないが、Op. 35-1のプレリュード（BWV U116）の初稿である（*Litterae Rarae*, 1969, p. 16）。全1葉の裏表に45小節が記譜されている。トッド（2009）に表葉のファクシミリが掲載されている。よく知られた作品の知られざる稿として、メンデルスゾーンの作曲の特徴を如実に伝えており、批判的校訂のために不可欠の資料と位置づけられる。

もうひとつは、最近まで財団法人日本近代音楽財団日本近代音楽館に所蔵されていた1葉の記念帳（BWV Y19）である。皆川達夫著『楽譜の歴史』（1985）において写真複製とともに公表されたが、関係各位のご理解のもと、『最初のワルプルギスの夜』のファクシミリ版にも再録させていただいた（星野、2005）。4分の2拍子、7小節からなる1段譜にメンデルスゾーンは「ヴァイオリンのためのエチュード、あるいは2台のヴァイオリンのためのカノン Etude für eine Violine, oder Canon für 2 Violinen」と上書きし、さらに「1844年3月11日ベルリン」という日付と、当時12歳だった神童ヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒム（1831～1907）への献辞、そしてサインを記している。メンデルスゾーンは生涯を通して幾多の記念帳にサインを求められたが、その際しばしば自作のカノンを書き込んだ。他の多くのカノンと同様に、これも解決の与えられていない謎カノンだが、作曲家の江端伸昭氏によると、16分音符遅れの同度のカノンであることは少し試すとすぐわかり、バッハのカノン技法を彷彿とさせるという³⁾。幼少より優れた対位法技法を身につけたメンデルスゾーンの面目躍如たるところであろう。なお、日本近代音楽館は、1966年開設の遠山音楽財団附属図書館を母体に1987年に設立されたが、2010年3月をもって閉鎖された。所蔵資料は明治学院大学に移管され、現在、公開に向けて整備中である。

3. 日本におけるメンデルスゾーン自筆書簡

日本で公にされている2通のうち、ひとつはごく短いメモ書きである（*Litterae Rarae*, 1969, p. 7）。内容的により興味深い、もうひとつの手紙をここでは検討しよう。メンデルスゾーンはこれを1845年11月15日にベルリンで書いた。受取人のクプシュについて詳細は不明だが、手紙の内容や宛名書きから、ベルリンで職探しをしていた声楽教師だったことがわかる⁴⁾。市参事会や警察との交渉を円滑に進めるべく、メンデルスゾーンは彼を市長に推薦したようである。市長が便宜を図ってくれたことをクプシュに知らせている。事務的な内容の行間からメンデルスゾーンの優しさ、思いやりがにじみ出てくるようだ。よく知られるように、彼はローベルト・シューマン（1810～56）やフェルディナント・ヒラー（1811～85）、ニルス・ゲーゼ（1817～90）

ら、同時代の作曲家たちの作品の演奏や楽譜出版を支援したが、そればかりでなく、こうしたごく普通の平凡な音楽家たちにも親身になって接し、必要であれば推薦状を書き、身元も保証したのである。1845年当時、メンデルスゾーンはライプツィヒ・ゲヴァントハウスのカペルマイスターのみならず、ザクセン王室楽長、プロイセン音楽総監督の肩書きも持ち、名実ともに音楽界の若き重鎮となっていた。多忙な日々を追われ、自らの体調を崩しつつも、他者のために労力を惜しまず、持てる力を人々のため、社会のために用いることを喜びとした、そんな彼の人間性に手紙を通して触れるのは、実に心温まる体験である。

この手紙は、メンデルスゾーンの自筆資料のうち最も早い時期に流入し、既に80年近く東京・駒場の財団法人前田育徳会尊経閣文庫に所蔵されている。前田育徳会尊経閣文庫は、加賀・前田家代々に伝わる典籍、古文書、美術工芸品等を保存管理するもので、数々の国宝や重要文化財が含まれる。前田家の第16代当主、利為侯爵（1985～1942）は明治・大正・昭和期に軍人として活躍したが、たいへん文化的な人物でもあり、若い頃にドイツ、英国、パリに遊学し、社交界で各国要人と交わった。1927年から1930年にかけては駐英大使館付武官を務め、欧州各地を視察し、また、数々の国際会議に日本代表として出席している。この間、利為侯は欧米著名人の手稿を好んで収集し、ナポレオン、ネルソン、ピョートル大帝、ウェリントン、リンカーン、フリードリヒ大王、ピスマルクら、錚々たる顔ぶれの手稿を212点購入した。夫人が音楽好きであったため、コレクションは作曲家の手稿にも及び、バッハやモーツァルトを含む7点の自筆譜と、シューマンやブラームスを含む20点の自筆書簡を入手した（『前田利為』、1998；樋口、2006）。これらはみな、額縁に入れて飾れるように英語のコメント付きの厚紙に裏打ちされているので、ロンドンの古書店を介し、ヨーロッパ各地でのオークションに手を伸ばしたと推測される。メンデルスゾーンからクプシュアテの手紙は、1927年にベルリンのオークションに、1929年にパリのオークションに出品されたことが判明している⁵⁾。それゆえ、後者のオークションを通してこれが利為侯の所蔵となり、1930年の帰国とともに文庫に収められたと推定できる。

その後、前田育徳会尊経閣文庫の音楽コレクションは、1967年に東京と大阪で開催された南葵音楽文庫の特別公開にあたって協力出展された。この時のカタログ『特別公開 南葵音楽文庫』（1967）には、前田育徳会所蔵の音楽コレクション全27点のリストおよび18点の写真複製が掲載されており、メンデルスゾーンの当該書簡も写真が収められている。このように、当カタログには、南葵音楽文庫の所蔵資料のみならず、複数の機関による協力出展が含まれていることに注意が必要である。日本語さえ読めれば、それらを問題なく区別できるのだが、海外では往々にして掲載物はすべて南葵音楽文庫所蔵と誤解される原因になった。実際、筆者も『メンデルスゾーン書簡全集』の研究者に尋ねられ、当該書簡の所蔵先を訂正したことがある。

南葵音楽文庫は、1918年に紀伊・徳川家第16代当主、徳川頼貞侯（1892～1954）によって設立された、日本初の本格的音楽図書館である（美山、2008）。1917年にロンドンのサザビーズのオークションで頼貞侯が落札したウィリアム・ヘイマン・カミングス（1831～1915）の蔵書474点を中核とし、他のコレクションも次第に加わって、1万点を越える収蔵へと発展した。と

りわけパーセルやヘンデルの貴重資料が注目される。しかし、関東大震災の被害や財政難等により、早くも1931年に閉鎖を余儀なくされ、その後、所有者も変わった。1970年から再公開されたものの、1977年には資料を寄託された財団法人が解散され、非公開の状態が続いていた。現在の所有者は財団法人読売日本交響楽団である。2006年より慶應大学が貴重資料のデジタル化に着手し、2009年10月13日に「南葵音楽文庫所蔵貴重資料デジタル画像」のテスト公開がインターネット上で開始された (<http://note.dmc.keio.ac.jp/music-library/>)。南葵音楽文庫には、メンデルスゾーンの貴重資料は含まれないが、コレクションの端緒となったカミングスの名前に、私たちはもう一度出会うことになる。

4. 日本独自のメンデルスゾーン資料

このように、西洋音楽の貴重資料が日本にもたらされたのは、大正期に入ってから、つまり国力が増し、一部の富裕層が文化的生活を謳歌するようになってからだが、西洋音楽そのものの導入は幕末の開国後まもなく始まった。それまで全く未知であった西洋音楽が一般の日本人に急速に普及していく過程において、重要な役割を果たしたのが、プロテスタントの讃美歌であり、そこから影響を受けた唱歌である。国立音楽大学の長谷川由美子氏に触発され、洋楽導入期の資料に目を通したところ、合唱曲や二重唱曲、独唱曲を中心に、実に多くのメンデルスゾーンの作品が、日本語訳ないし日本語の新たな歌詞を付けて讃美歌・唱歌に取り入れられていることを確認した⁶⁾。当時の欧米におけるメンデルスゾーンの人気を反映していると言えよう。本論では、こうした例の中から、日本では長らく「あめには栄え」と歌い親しまれてきた讃美歌を取り上げる⁷⁾。というのも、この曲はこんにちまで讃美歌として歌い継がれてきたばかりでなく、昭和初期まで唱歌としてもたいへん好まれていたからである。

まずは、メンデルスゾーン自身の作曲に遡ろう。この曲は1840年6月24日、ライプツィヒにおけるゲーテンベルク活版印刷術400年記念祭のために作曲された《祝祭歌》(MWW D4)の第2曲である。男声合唱と金管アンサンブルにより、マルクト広場におけるゲーテンベルク記念碑の除幕式にて歌われた。祝祭のために同時代人によって書かれた歌詞の内容は、印刷術の発明を近代文明の到来と結びつけ、闇から光への転換になぞらえる、極めて愛国的なものである。以下、対訳(拙訳)を挙げる。

Festgesang No. 2 (Text von A. E. Prölss)

1. Vaterland, in deinen Gauen
brach der gold'ne Tag einst an,
Deutschland, deine Völker sah'n
seinen Schimmer niederthauen.
Gutenberg, der deutsche Mann,

祝祭歌 第2曲 (A. E. プレルス詩)

祖国よ、汝の沃野に
黄金の日が昇った
ドイツよ、汝の民らは
その薄明かりが広がりゆくのを見た
ゲーテンベルク、ドイツの男が

- | | | |
|----|--|---|
| | zündete die Fackel an. | たいまつに火を灯したのだ |
| 2. | Neues allgewalt'ges Streben
wogt im Land des Lichtes auf,
seinem raschen Siegeslauf
folgt ein allbeglückend Leben.
Gutenberg, der grosse Mann,
hat dies hehre Werk gethan. | 新しい無限の力が
光の国に逆巻く
その凱旋の走りの後に
幸なる生命が訪れる
グーテンベルク、偉大な男が
この崇高な業を成し遂げたのだ |
| 3. | Ob die Finsternis sich wehrt,
ob sie führet tausend Streiche,
ob sie wüthet, sich empört,
sie erblasst, sie sinkt als Leich,
doch gekrönt als Siegesheld,
steht das Licht vor aller Welt,
Gutenberg, du wackrer Mann,
du stehst glorreich auf dem Plan. | たとえ闇が逆らうとも
たとえ闇が幾千もの打撃を加えようとも
たとえ闇が荒れ狂い、抗うとも
闇は青ざめ、屍として沈みゆく
そして、勝利の勇者の冠を授けられて
光は世のすべての前に立つ
グーテンベルク、勇敢な男
汝は輝かしく出現する |

初演は好評を得て、ドイツでは《祝祭歌》全4曲のピアノ譜とパート譜が同年中に出版された⁸⁾。一方、英国での出版にあたっては、このように特殊な歌詞内容が障害となったことは想像に難くない。メンデルスゾーンはとりわけ第2曲の歌詞について英訳者と何度もやりとりを重ね、最終的に、知恵と真理に対する抽象的な賛歌とした⁹⁾。また、混声合唱と鍵盤伴奏用に編曲した上で、1844年に出版に供した¹⁰⁾。英国では、新しい歌詞内容による第2曲が人気を集め、これのみ単独で販売されるようになる。そして、メンデルスゾーンの没後、1855年にウィリアム・カミングスが、以前より英国で歌われていたクリスマスの歌詞「聞け、天使の軍勢が歌うのを *Hark! The Herald Angels sing*」(1739年チャールズ・ウェズレー原作、何人かの編作を経た歌詞)を当てはめ、翌1856年に出版すると、たちまち大評判となる。カミングスは聖歌隊出身で、声楽教師、音楽学者として活躍した人物であり、1846年、バーミンガムでのメンデルスゾーンのオラトリオ《エリヤ》初演の際に16歳の少年として合唱に参加し、作曲者の指揮のもと歌ったことが知られる。上記で言及した南葵音楽文庫の中核となったのが、このカミングスの遺産である。

さて、*Hark! The Herald Angels sing* はまもなく、各国語に訳されて全世界で歌い親しまれるようになった。日本でも最初期の讚美歌集に取り入れられている。手代木俊一監修『明治期 讚美歌・聖歌集成』(1996)によると、たとえば、1884年出版の『譜附 基督教聖歌集』に古い日本語訳により所収されている。第37曲としてト長調、4分の4拍子、4声体の楽譜と、4節からなる歌詞が掲載されている。第1節のみを次に挙げる。「あもりしきみの おとづれつぐる あまつみ使ひの うたふこえをきけ あめにはさかえ くににはやすき なべてよびとに みめぐみあれと」(旧字は新字に変更)。この聖歌集には宣教師用ローマ字版『KIRISUTOKYO SEIKASHU』

(1887年出版)もあり、そこでは歌詞がローマ字で書き下され、日本語が読めなくとも一緒に歌えるようになっている。音楽的に注目されるのは、メンデルスゾーンの《祝祭歌》原曲も、カミングスによる *Hark! The Herald* への改作も、アウフタクトで始まるのに対して、日本語讃美歌では1拍目からの開始にずらされている点である。日本人のリズム感に即したのだろうが、この拍子のずれはこんにちの讃美歌集でも、また下記で扱う唱歌の数々でも保持されている。

唱歌への採用の最初の例は、1893年出版の『小學唱歌』に見られる(伊澤、1893)。ここでは「皇統」という見出し語が付けられ、万世一系の天皇の血筋を褒め称え、その栄光は異国にまで輝くという歌詞が与えられている。作歌は谷勤。2節からなる歌詞の第1節を挙げる。「神代の昔しも明治の今も 変わらぬ皇統の我がおほみかど うごかぬ志るしの三種のみたから 揚げやもろ人よるづ世までも。」楽譜は旋律のみで、ホ長調、4分の4拍子による。4分音符=84のメトロノーム指示がある。

1906年出版の『高等小學唱歌』では、「進取の歌」という見出し語が付けられ、豊臣秀吉の朝鮮出兵を日本男児の誇りとし、我らも国家のため勇敢に進軍すべしという歌詞が与えられている(大橋、1906)。作歌は大和田[建樹]。歌詞は2節からなる。「一、國威を四海に、かがやかさんと、大軍おこして、波路を渡り、うち入る我兵、破れし明軍、それより我には、手出しも得せず。二、豊臣秀吉、かれ何人ぞ、我らも同じく、日本の男児、國家のためには、社會のためには、火水の中にも、進めや進め。」楽譜は旋律のみで、ヘ長調、4分の4拍子による。「快活二」と日本語で発想表示がある。

1910年出版の『女學唱歌』では、「日の御旗」という見出し語により、国旗が称揚されている(田村、1910)。作歌は桑田春風。2節からなる歌詞の第1節を挙げる。「照る日の御旗は 日出づる海の、たぐひぞ稀なる 皇國のしるし。外つ國人さへ 光を仰ぎて、御稜威を畏む 君が代たふと。」楽譜は旋律のみで、ト長調、4分の4拍子により、「雄大二」と日本語で発想表示がある。作曲者は「ベートーベン」と誤記されている。

その他にも、帝国主義的、軍国主義的な歌詞を付けた例が昭和初期まで続く。昭和に入ってからのものには、たとえば、1932年出版の『女子音楽教本』に収められた「祝ひ日」がある(福井、1932)。作歌は白澤清人。2節からなる歌詞の第2節を挙げる。「よき日をいはひて そのかみしのび よき日をたたへて ゆくすゑおもふ 國民擧りて この日を祝はん うごかぬ寶祖 御國の基 けがれぬ歴史 御國の寶。」楽譜は旋律のみで、ト長調、4分の4拍子による。“Moderato”とイタリア語の発想表示がある。

また、翌1933年出版の『中等女子音楽教科書』では、「軍艦」という見出し語が与えられている(船橋、1933)。作歌は川路柳虹。2節からなる歌詞の第2節を挙げる。「旭日にかがやく 艦の旗風 精銳譽は 四海に高し 敵艦來らば 忽ち撃滅 わが海軍の 威力を見よや わが海軍の 威力を見よや。」楽譜は旋律のみで、ヘ長調、8分の4拍子により、“Moderato”とイタリア語の発想表示がある。

ともに歌うことを通しての愛国教育は、唱歌の典型的なあり方であり、以上のような例の羅列

は驚くには値しない。また、これらの歌詞の変遷は、日本における独自の展開である。しかし実は、ドイツにおいても《祝祭歌》は、同じような変容を見せているのである。筆者は以前、メンデルスゾーンの作品のパロディに関心を抱き、ドイツの図書館にて出版譜を調査したところ、《祝祭歌》にも複数のパロディを発見した。たとえば、20世紀初頭の出版と推測される「ルター・カントータ」というパロディでは、原曲の歌詞ほぼそのままに、グーテンベルクがマルティン・ルターに置き換えられている¹¹⁾。同じ頃の「皇帝カントータ」というパロディでは、ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世に忠誠を誓い、海上にはためくドイツ国旗を称揚する歌詞が与えられている¹²⁾。異なる国においてこの曲が同じように好んでパロディの対象となった誘因のひとつは、音楽そのものの際だった特徴にあり、もうひとつは、時代や社会背景の共通性にあると言ってよいであろう。後者の対訳（拙訳）を挙げる。

Kaiserkantate (Text von Schwartzkopff)

1. Heil dem Kaiser, Heil dem treuen,
starken weisen deutschen Mann,
dem die Seinen zugetan,
den ergrimmt die Feinde scheuen.
Er geht allzeit uns voran:
Heil dem Kaiser, stimmt an!
2. Schwert gerüstet, löwenmutig
fordert er des Landes Macht,
heischet nicht in wilder Schlacht
Siegeslorbeer ernst und blutig.
Wilhelm Heil, im milden Glanz,
ziert dein Haupt des Ölbaums Kranz!
3. Über alle Meere weh'n
Schon des deutschen Landes Farben!
Seine Söhne kühnlich stehn,
ob sie Sieg, ob Tod erwarben,
unsern Führer, unsern Held
neidet uns die ganze Welt.
Er geht allzeit uns voran:
Heil dem Kaiser, stimmt an!

皇帝カントータ (シュヴァルツコッフ詩)

皇帝万歳、誠実で
強く賢きドイツの男万歳
彼は臣民に親愛され
敵に怒気を含みて怯えられる
彼は我らの先頭を常に行く
皇帝万歳と声を合わせよ
剣を携え、獅子のように剛胆に
彼は国の力を結集する
激闘での血なまぐさい
勝利の月桂冠を要しはしない
ヴィルヘルム万歳、穏和な輝きに満ち
御頭をオリーブの冠で飾られる
全海原に既にはためくのは
ドイツの国旗
彼の息子らは勇敢に立ちあがる
勝利かさもなくば死が待ち構えようとも
我らの指導者、我らの英雄がゆえに
全世界は我らをうらやむ
彼は我らの先頭を常に行く
皇帝万歳と声を合わせよ

5. おわりに

世界がメンデルスゾーン生誕 200 年に沸いた 2009 年は、横浜開港 150 年、そして日本におけるプロテスタント宣教 150 年でもあった。そして 2011 年は、プロイセンと日本の間で就航通商条約が調印されてから 150 年である。この 150 年の日本の歩みを振り返った際、貴重な原典資料への信奉にしる、音楽に対するもっと柔軟なアプローチにしる、メンデルスゾーンが思ったより身近にいた気がしてくる。日本におけるメンデルスゾーン資料に関しても、私たちは想像以上にさまざまな切り口で論じることが可能なのである。

注

- 1) 本論は、2009 年 12 月 18 日に東京・港区のドイツ文化センターにて行われた「メンデルスゾーン生誕 200 年記念講演とシンポジウム」での筆者の講演「日本におけるメンデルスゾーン資料」を加筆、改稿したものである。
- 2) 『メンデルスゾーン作品総目録』の正確な書誌は引用文献リストに挙げたとおりだが、*Mendelssohn Werkverzeichnis* と略称される。目録中の分類番号はその頭文字をとって MWV と呼ばれ、メンデルスゾーンの作品の同定に用いられる。本論でも MWV 番号を記す。
- 3) 自筆譜に関して示唆に富む意見交換をしてくださった江端伸昭氏に感謝する。
- 4) 宛名は、Herrn Gesanglehrer Kupsch bei Frau Schuldirektor Kupsch。本文は次の通り。
Hochgeehrter Herr | Meiner gestrigen Mittheilung muß ich heut noch hinzu- | fügen, daß
Herr Oberbürgermeister Krausnick nun so | eben über Ihre Angelegenheit geschrieben hat,
ud. sein | Billet mit folgenden Worten schließt: | „ud ist somit gleich heut auf meine
Veranlassung von | Seiten des Magistrats an das Polizeipräsidium geschrieben | ud.
demselben gesagt worden, daß wir die Subsistenzfähig- | keit des H. Kupsch als
nachgewiesen erachteten ud. gegen | die sofortige Ertheilung der Erlaubnis zur dauernden |
Niederlassung hieselbst nichts zu erinnern hätten. “ | Ich hoffe nun bestimmt daß Sie keine
weiteren | Schwierigkeiten finden werden, ud. würde mich sehr freuen | wenn Sie mir noch
während meines Hierseins gute Nachricht | vom Erfolg geben könnten. | Mit vollkommener
Hochachtung | ergebenst | Berlin 15 Nov. 1845 | Felix Mendelssohn Bartholdy
- 5) 以下のオークション目録の情報をご教示いただいたラルフ・ヴェーナー氏に感謝する。Karl Ernst Henrici, Auktionskatalog (Berlin, 24./25. Januar 1927), p. 68, Nr. 453; Pierre Cornuau, Cat. 174 (Paris, Mai 1929), lot 18169.
- 6) 《祝祭歌》に基づく日本語讃美歌や唱歌の例は、国立音楽大学附属図書館の長谷川由美子氏の調査結果に負っている。貴重な情報を提供してくださった長谷川氏に感謝したい。
- 7) こんにち広く親しまれている「あめには栄え」の歌詞は、1954 年出版の日本基督教団『讃美歌』（98 番）に見られる。1997 年出版の同『讃美歌 21』（262 番）では、「聞け、天使の歌」という新しい歌詞に変えられている。1959 年出版の日本聖公会『古今聖歌集』（18 番）の歌詞は「かみには栄え」と始まり、日本基督教団の歌詞とはやや異なる。2006 年出版の『日本聖公会聖歌集』（81 番）では、多少の不快語の修正の上、『古今聖歌集』と同じ歌詞が踏襲されている。

- 8) ドイツ初版ピアノ譜の書誌は次の通り。FEST-GESANG für Männerchor componirt zur Eröffnung der am ersten Tage der Säcularfeier der Erfindung der Buchdruckerkunst auf dem Markt zu Leipzig Statt findenden Feierlichkeiten von FELIX MENDELSSOHN-BARTHOLDY. Klavier-Auszug. No. 6418. Leipzig, bei Breitkopf & Härtel. [1840]
- 9) 英訳詞の試行錯誤については、Cooper (2008) の pp. 216–218、239–243 を参照のこと。第2曲の最終的な英訳は次の通り。1. Let our theme of praise ascending, Blent in music's lofty strain, Soaring thro' the starry main, Peal in echoes never ending. Leaning dawn'd, its light arose; Thus the Truth assail'd its foes. 2. Faith and Hope began to banish, Doubt and soul-appalling Fear: Spreading, shining still more clear, Error in their beams will vanish, Leaning dawn'd, its light arose; Thus the Truth assail'd its foes. 3. Mortals roam'd without a guide, Darkness clouded ev'ry nation; Not a ray could be descried, All was gloom and desolation: Learning dawn'd, its light arose: Thus the Truth assails ist foes, Till the earth with one accord, Shall adore and praise the Lord.
- 10) イギリス初版の書誌は次の通り。FEST GESANG. Hymns of Praise, FOR SOPRANO, CONTRALTO, TENOR & BASS, Composed AND Arranged WITH AN Accompaniment FOR THE Piano-Forte or Organ BY FELIX MENDELSSOHN BARTHOLDY. The Words written & adapted by W. BARTHOLOMEW. London Published by J. J. EWER & Co. [1844]
- 11) 書誌は次の通り。LUTHER-CANTATE für Männerchor mit Begleitung des Pianoforte oder der Orgel nach dem FESTGESANG von Felix Mendelssohn Bartholdy. Berlin-GroßLichterfelde, Verlag von Chr. Friedr. Vieweg's Buchhandlung. V. 48. 出版年不詳。歌詞はブレルスをもとに Franz Heese、ピアノ編曲は Gustav Hecht によるとの記載が楽譜冒頭にある。
- 12) 書誌は次の通り。Kaiserkantate. Text von Prof. Schwartzkopff. Nach Mendelssohns Festgesang an die Buchdruckerkunst. In Fr. Kriegeskotten (Ed.), *Schulfestchöre für gemischten Chor mit Klavierbegleitung. Zum praktischen Gebrauche an den höheren Lehranstalten* (pp. 31–41). Heft 1. No. 5. Berlin-GroßLichterfelde, [Verlag von Chr. Friedr. Vieweg's Buchhandlung.] V. 446. 出版年不詳。

参考文献

- Badstübner-Gröger, S. (Ed.) (2006). *Schlösser und Gärten der Mark: Börnicke*. 1. veränderte Nachauflage. Berlin: Deutsche Gesellschaft e. V.
- Cooper, J. M. (2008). "For you see I am the eternal objector" : On performing Mendelssohn's music in translation. In S. Reichwald (Ed.), *Mendelssohn in performance* (pp. 207–249). Bloomington: Indiana University Press.
- 福井直秋編 (1932) 『女子音楽教本』 第三學年用 株式會社帝國書院
- 船橋榮吉、内藤俊二共編 (1933) 『中等女子音楽教科書』 卷之一 大阪開成館
- 『ゴッホと日本』 (1992) 京都国立近代美術館／世田谷美術館
- 樋口隆一 (2006) 「日本の洋楽資料コレクション」『バッハから広がる世界』 春秋社 pp. 433–450
- 星野宏美 (2003) 『メンデルスゾーンのスコットランド交響曲』 音楽之友社
- 星野宏美 (2005) 『玉川大学教育博物館所蔵 メンデルスゾーン自筆ピアノ譜 ゲーテの詩に基づく《最

- 初のワルプルギスの夜》(作品 60)』 雄松堂
- Hoshino, H. (forthcoming). "Es nimmt sich gut aus" : Mendelssohns Arrangements für Klavier zu vier und zwei Händen. In Schmidt, Ch. M. (Ed.), *Felix Mendelssohn Bartholdy – Kompositorisches Werk und künstlerisches Wirken – Kongressbericht Leipzig 2009*. Wiesbaden: Breitkopf & Härtel.
- 磯山雅、小林義武 (2005) 『《満ち足りたプライゼの町》 BWV 216 オリジナル・パート譜ファクシミリ版』 東京書籍
- 伊澤修二編 (1893) 『小學唱歌』 卷之四 下 大日本圖書株式會社 [訂正版 (1894)]
Leipziger Ausgabe der Werke von Felix Mendelssohn Bartholdy (1997-). Wiesbaden: Breitkopf & Härtel.
- Litterae Rarae*. (1969). Liber secundus. Tokyo: Biblioteca Musashino Academia Musicae.
- Loos, H. & W. Seidel (Eds.) (2008-). *Felix Mendelssohn Bartholdy: Sämtliche Briefe*. 12 vols. Kassel: Bärenreiter.
- 『前田利為と尊經閣文庫図録』 (1998) 石川県立美術館
- 美山良夫 & 篠田大基 (2008) 「南葵音楽文庫所蔵資料 コレクションの沿革」 『Oxalis 音楽資料デジタル・アーカイヴィング研究』 I, 11-14
- 皆川達夫 (1985) 『楽譜の歴史』 音楽之友社
- 日本基督教団讃美歌委員会編 (1954) 『讃美歌』 日本基督教団出版局
- 日本基督教団讃美歌委員会編 (1997) 『讃美歌 21』 日本基督教団出版局
- 日本聖公会 (1959) 『古今聖歌集』
- 日本聖公会 (2006) 『日本聖公会聖歌集』
- 大橋銅造、納所辨次郎、田村虎藏共編 (1906) 『高等小學唱歌』 一學年上 兒童用 株式會社國定教科書共同販賣所 [訂正再版 (1908)]
- 田村虎藏編纂 (1910) 『教科統合 女學唱歌』 卷の一 株式會社國定教科書共同販賣所
- 手代木俊一監修 (1996) 『明治期 讃美歌・聖歌集成』 第 15 卷 大空社
- トッド、R. L. (2009) 「2つの協奏曲の成立 メンデルスゾーンのピアノ協奏曲 ホ短調」 (星野宏美 訳) 『武蔵野音楽大学研究紀要』 41、27-52. [原著: Todd, R. L. (2009). Mendelssohn's Third Piano Concerto, a Tale of Two Concertos.]
- 『特別公開 南葵音楽文庫』 (1967) 読売新聞社
- Wehner, R. (2009). *Felix Mendelssohn Bartholdy: Thematisch-systematisches Verzeichnis der musikalischen Werke*. Wiesbaden: Breitkopf & Härtel. [=Mendelssohn Werkverzeichnis]